長崎大学　子どもの心の医療・教育センター　e ラーニング
講師：岩永　竜一郎

【行動の評価（適応行動、ADHD 評価含む)】

＜行動の評価＞
・観察による評価　・面接法　・評価尺度の利用　・環境の評価

＜行動観察の特徴＞
・子どもの発達上及び、教育上の課題の取り組みの状況や子供を取り巻く環境についての情報収集。
・人の自然な行動を生態学的に日常生活の中で捉える事ができる。
・対象者に対する要求が少ないので乳幼児・障害児を対象とすることができる。

＜行動観察の場＞
・学校や保育園での生活場面　・検査場面　・療育場面　・家庭生活場面　・地域での活動場面

＜行動観察の手法＞
・日誌法：親が子供の行動を日記に記録したものに由来する。保育日誌や看護日誌等も日誌法のデータである
・逸話記録法：日誌法のようなある特定の個人ではなくより多数の人物の一般的な行動や言語の記録をいう
・時間見本法：行動を任意の時間間隔で区切り、その各々における特定の行動の生起を記録する方法。
・事象見本法：焦点となる行動を決め、その生起要因や過程を分析する方法。
・評定尺度法：行動を一定時間観察し、被観察者の印象や示した行動の強度を形容詞や行動特徴に対する連続的尺度で評定する。

＜面接法＞
・構造化面接：予め決められた質問項目に沿って質問しながら行われる面接。メリットは、面接者のスキルに多少差があってもクライエントに影響を及ぼさずに面接を進められる事。
・非構造化面接：自由回答形式。会話形式に沿った面接。メリットはマニュアルにとらわれることなくクライエントの反応によって臨機応変に対応しながら面接の目標に関連した色々な情報を得ることができる。面接者の高度なスキルが要求される。
・半構造化：構造化面接と非構造化面接の間を取って進められる面接。質問項目も決めておくが会話の流れに応じ質問の変更や追加を行い、自由な反応を引き出すもの。

＜評価尺度＞
・Vineland-Ⅱ適応行動尺度　・SDQ　・ユースセルフレポート　・異常行動チェックリスト日本語版
・子どもの行動チェックリスト教師用（TRF）　・ADHD-RS-Ⅳ日本語版　・Conners 3 日本語版
・CAARS 日本語版

＜環境評価＞　ICF モデルに基づく評価
・物理的環境：黒板からの距離が適切か、教師からの支援が受けられやすい距離かなど
・社会的環境：スケジュールの変更、教室移動に対して見通しが持てるように事前に指示をしているか、同学年担当教師や保護者との共通理解ができているかなど